『小さなアプローチ』

封筒を閉じ、垂らした蝋に印璽を置く。
少し時間を空けてから印璽を慎重に持ち上げれば、綺麗な羽模様の封蝋が完成する。

『親愛なるセリアへ』

表にそう書かれた手紙を手に取って眺めると、満足感から自然と笑みが浮かんでしまう。

セリアは、このサイレニアという国の騎士団で部隊長を務めている、私の大切な幼馴染だ。
彼女はお城のある中央都市で仕事をしており、国の外れにあるこの田舎へ戻ってくるのは一年に数回で、中々会える機会が少ない。
そのため、私達はこうして定期的に手紙を送り合っては近況報告をしている。

次に会えるのはいつになるだろうか。そんなことを考えながら、机の上を片付けていく。
ふと、カツカツという音と「クワッ、クワッ」という鳴き声が耳に入ってきた。
聴き馴染みのあるその声の方へ反射的に顔を向けると、外から嘴で窓を叩くまあるい青色が視界に映る。
自分の表情が緩むのを感じながら窓を開けてあげれば、その子は小さくジャンプをしながら部屋の中へと入ってきた。
「ファズ、また遊びに来てくれたの？」
「キュウ！」
机の上で小さな翼をパタパタさせながら、ファズは肯定するように鳴いた。

青くてまあるいこの子は、アズリア竜のファズ。仔竜の男の子だ。
きっかけはなんだったのか私にはよくわかっていないけれど、ファズは随分と私に懐いてくれているようで、こうして定期的に家へ遊びに来てくれる。
こんなに可愛い仔竜に好いてもらえるのは純粋に嬉しいし、私もファズのことが大好きなので、彼と会えることは私の楽しみの１つだ。

机の上で私を見上げながら、翼をパタパタとさせていたファズは、嘴を突き出すと咥えていたお花を私へ差し出した。
「そしかして、私へのプレゼント……？」
「キュウ！」
「わぁ……！　ありがとう……！」
お花を受け取り、まあるくふわふわとした体を膝の上に乗せて撫でてあげれば、ファズは気持ちよさそうに目を細めてくれる。
「そういえばファズ、今日はちゃんとゼノアにお話してから来た？」
「クゥ……！？」
声を上げ、ファズは気まずそうに私から目線を逸らす。
本当に表情豊かな子だな。と思いながら、私はファズがまた黙ってここへ遊びに来たことを悟った。

ファズは私のもう一人の幼馴染、牧場を経営しているゼノアという男性の相棒であり、友人であり、家族である。
ゼノアとファズは、基本的に二人で私の家へ遊びに来てくれることが多い。
だが今日のように、ファズはゼノアへ何も伝えず勝手に一羽で遊びに来ることもあり、その度にゼノアがファズを探してここへ迎えに来てくれるのだ。
報告する時間も惜しいと思うくらい懐いてくれているのは、嬉しいことではある。けれど、何も言わずに急にいなくなってしまえば、ゼノアは心配してしまう。
困った子だな。でもいつもと同じなら、きっと今日も彼が迎えに来てくれるはず。

そう思っていると、タイミングよく家の扉がノックされた。ほら、やっぱり。
「開いてるよ。どうぞ」
その言葉で扉が開き、ファズの相棒であり、私の幼馴染であるゼノアが家の中へと入ってくる。
「いらっしゃい。ゼノア」
「よっ、サヤナ。突然押しかけて悪い、ここにファズは――」
私の膝の上で寛ぐファズを見たゼノアは、そう途中で言葉を萎ませた後、溜息を１つ吐いた。
「お前……やっぱりここにいたのか！」
「……クェ」
小さく不機嫌そうに鳴きながら、ファズはそっぽを向く。
「全く、ちょっと目を離すとすぐこれだ。急にいなくなられたら心配するって、いつも言ってるだろう」
ゼノアはそう言いながらこちらへ近づいてくると、腰を折り曲げて私の膝に座るファズを覗き込んだ。
「ほら、帰るぞ」
「クエッ！」
「イヤじゃない、帰るぞ」
「クエェェッ！！！！」
「イテテテッ！　嘴で突っつくな！」
全力で抵抗するファズを抱き上げ、ゼノアは私へ目線を向ける。
「悪いなサヤナ、いつもこいつが迷惑かけて……」
「迷惑だなんて……私はファズに会えて嬉しいから、いいことしかないよ」
「そうか、そう言ってくれるのはありがた――」
「クェッ！」
「イッテ！」
ゼノアの手を嘴で思いっきり突っつき解放されたファズは、小さな翼を一生懸命羽ばたかせながら私の元へ戻ってくると、膝の上に降り立った。
「キュウ、キュウ♡」
「こいつ……サヤナの前ではかわい子ぶりやがって……」
先程のゼノアに対するものとは打って変わって、ファズは私を見上げながらとても可愛らしく鳴いた。
ゼノアは眉を顰めた恨めしそうな顔でファズを見ながら、突かれて赤くなった手を摩る。
私は自分の膝の上で上機嫌に体を揺らすファズに両手で触れると、目が合うように顔の高さまでゆっくりと持ち上げた。
「いい？　ファズ。今後はもう、勝手にここに来ちゃダメ」
「キュウ？！」
「ゼノアが心配しちゃうから、遊びに来るなら、ちゃんとゼノアに伝えてから来ること。いい？わかった？」
「ク、クゥ……」
しょぼんとしながらも、ファズは私の言葉にちゃんと頷いた。
「うん、いい子だね」
膝の上へ降ろし頭を撫でてあげると、私の手に擦り寄りながら、ファズは嬉しそうに翼をパタパタとさせた。
「全く……俺が言っても一切聞かなかったのに、サヤナの言うことなら聞くのかよ。さすがの俺も傷つくぞ……」
そう呟くゼノアを余所に、ファズは撫でられる気持ちよさに夢中で、私はそんなファズを撫で続けながらつい笑ってしまった。